

よさこい祭りの伝播

清水希容子

財団法人日本経済研究所 地域未来研究センター 上席主任研究員

第1回は、戦後1953年に高知市で生まれたよさこい祭りが、全国各地へ伝播した様子をとりあげます。よさこい祭りは、毎年8月の4日間、鳴子を持った踊り子たちが、よさこい節に合わせて高知市内の競演場や繁華街を踊り歩く情熱的なお祭りです。高知市以外のまちで多く行われるようになったのは、40年後の札幌市の「YOSAKOI ソーラン祭り」（1992年）以降のことです。よさこい祭りを偶然高知市で見た北海道の学生が感動し、地元に戻ってもできないかと企画したことがきっかけでした。

その後の約10年間で、よさこい祭りは全国100ヶ所以上に瞬く間に広まりました。右図によると、始まった年が最も多いのは、2000年の23ヶ所、次いで2001年の19ヶ所、1998年の13ヶ所、1999年と2002年の11ヶ所で、1998年からの5年間に特に集中しています。

よさこい祭りの魅力は、楽曲の一節を入れ鳴子を持つルールさえ守れば、チーム毎に踊りや音楽や衣装を自由に表現できる点です。チーム編成やレベル

に条件はなく、どんな小さなまちや人々にもその門は開かれています。まちへの愛着心を共有することができたり、さらには、よさこいをきっかけとしたまち同士のつながりへと広がりを見せたりしています。

従来の伝統的なお祭りとの違いは、参加チームが地縁・血縁ではなく“自由な縁”で構成されている、学生や女性を中心となるケースが多い、観客の存在が不可欠な見せるお祭りである点です。

江戸時代に歌舞伎が江戸から地方に伝播し、その土地の舞踊などと融合した「地芝居」の例がありますが、よさこい祭りのように地方から地方へこれほどまで急激に伝播したお祭りはほとんどないと言ってよいでしょう。なぜ、よさこい祭りはこのように全国各地へ伝播されたのでしょうか。そこには、祭りを通して感動を起し地域の活力を生み出したい、失われつつある地域社会と人間とのつながりを復活させ互いに感じ合いたい、という潜在的な人間本位な思いがあるのかもしれません。

地方分権や道州制の大きな流れの中で、わが国の地域社会はますます自立的かつ持続的な発展が求められています。地域の未来についてさまざまな視点でとらえながら、現場の具体的な課題解決に貢献していくために、当研究所内にこのたび「地域未来研究センター」を開設いたしました。

今月号より、「地域未来研究センター」コーナーを設けて、従来の「地域だより」に加え、新たに二つのシリーズがスタートします。

①【研究】 地域研究・地域文化シリーズ

真の地域の時代を迎えるにあたり、地域主権や生活重視という言葉が数多く聞かれるようになりました。当シリーズでは、高い地域意識の原動力として、祭り、食、スポーツや音楽など日常生活に密着した“文化”を取り上げ、地域発展のメカニズムを分かりやすく伝えていきます。

②【寄稿】 地域シンクタンク～北から南から～

全国には地方銀行系、自治体系など“地域シンクタンク”と呼ばれる多くの研究機関があり、地域性のある優れた調査・研究（『ご当地レポート』として当研究所のHPにて紹介）が行われており、当研究所としても常に良きパートナーでありたいと願っています。

当シリーズでは、各地でご活躍の地域シンクタンクを紹介、その研究員の方に、産業・環境・交通・観光・生活スタイル・文化・経済などの分野から、地域性豊かな旬の話題を提供していただきます。



チームによる華麗な前進

(高知市のよさこい祭りより、写真提供：(社)高知市観光協会)

よさこい祭り(1953)の伝播地図



(社)高知市観光協会 HP (2009年6月時点) データより
 (財)日本経済研究所にて作成。

鳴子を持つてのパフォーマンス

(原宿表参道元氣祭スーパーよさこい(東京都)より、
 写真提供：原宿表参道元氣祭スーパーよさこい事務局)

